

カトリック 高松教区報

2008年5月4日(第123号)
発行所 カトリック高松司教区 広報委員会
〒760-0074 高松市桜町1-8-9
TEL 087-831-6659 FAX 087-833-1484
Email
教区:tkcuria@mxi.netwave.or.jp
広報:tk-koho@mxi.netwave.or.jp
生涯養成:yosei@takamatsu.catholic.ne.jp
http://www.takamatsu.catholic.ne.jp/



一八八日本殉教者列福を迎えるにあたって

高松教区長 溝部 脩

今年には長年の念願であった日本殉教者列福を迎える年となっております。四国関係の福者が公式にはいませんが、結城了雪神父などはれつきとした四国出身の殉教者です。また高知出身の田中夫妻も二〇五福者の一人であり、パウロ三木、伊予徳運神父といった人たちがいます。東北の会津で殉教した人たちの間に愛媛出身の人たちがいます。私は仙台にいた関係で、東北で働いた司祭たちの伝記は殆ど書き上げています。その中には四国で働いた人もいます。せつかく四国にいたので、今は昔四国で宣教した司祭たちの生涯を書くことを決めています。要するに殉教者のことを知るということがまず第一です。

高松教区でも、複数の講師に依頼して一月から一年間を通して講演会を企画しています。講演会というだけでなく、に終わる可能性がありますが、今回の列福は単に勉強することにあるのではなく、殉教者が投げかけるメッセージを受け止めることにあると思います。

殉教者が投げかけるメッセージを受け止めよう



「殉教者の霊性」講座 (四国カトリック会館)

今年には日本全国で殉教者を讃える講演会や殉教祭が開かれることでしょう。しかし、これらを単なるお祭り騒ぎ、またはイベントに終わらせたくないというのが、私たち司教団の希望です。殉教祭を高松教区が企画したことはありませんが、知恵を出し合ったなら私たちの教区においても実現する可能性はあります。これらの可能性について信徒の皆さんからも意見を

を連載しております。殉教の意味を理解するのに役立つ材料にしたいと思っただけです。現代の諸問題を踏まえたうえで、四〇〇年前に生き、亡くなった信仰者たちの姿を描き出したいと思っただけです。彼らも私たちと同じく時代の矛盾と悲しみをしっかりと生きた人たちでした。同様に家庭を愛し、自然を愛で、人をいっつくしみ、精一杯自分に与えられた生を生き抜いた人たちだったのです。過去の出来事を単に過去の出来事にとどめるのではなく、現代に生きている私たちへのメッセージとして受け止めていくのです。

主な記事

- 2面 司祭異動
- 2~4面 委員会報告
- 4~5面 受洗者喜びの声
- 5面 医療のともしび
- 6~8面 地区だより
- 9面 転入者の紹介
- 10面 お知らせコーナー

はばたき
救い主がお生まれになったとの報に接し、はるか東方の三人の博士がベツレヘムへ携えて行き、幼子イエスに捧げた品は何でしたでしょうか。乳香や没薬とともに、富の象徴である黄金も含まれていましたね▼黄金は最も輝かしい金属ですが、私たちがとってそれは、与えられた試練を練達により克服した後に得ることのできる最上の富、信仰だと言えるでしょう▼コラム子の暮らす高知県香長平野では、三月下旬に早々と田植えを済ませ、早場米としての価値を付加し市場に送り出されています。そのため、他県より一足早く黄金色の風景を目にすることが出来ます。商品名として各地の黄金米もいろいろと出回っていますね▼輸入品・国産品に限らず、次々と発生・発覚した食を取り巻く事故、事件をきつかけに、食の安全・安心に対する声高な要求が聞こえています。単に食料生産の術としてだけでなく、市場経済の尺度では測り得ない心の渇きを潤す場としても農の価値を再認識して頂きたいものです▼皆さんは、今年の黄金週間を如何お過ごしでしょうか。



殉教者に倣い 信仰を生きる

生涯養成委員会 Srメリー・ギリス

二〇〇八年一月の列福式に向け、カトリック教会共同体の一員としての意識を強め、信仰生活をより深いものにするために、昨年九月に行われたシンポジウムと一月から三月までの司教様による「殉教者の霊性」講座を実施しました。年度が変わって、四月から五名の講師(岡本哲男神父、松永洋司

1月26日、2月9日、3月8日の3回の講座を通して溝部司教は殉教者について「心を揺さぶる内容」の話をしました。「ヨハネ原主水『人生にやり直しがきく』」、「レオ税所七右衛門『信教の自由と政教分離』」、「トマス金鍔次兵衛『柔軟にして想像力たくましい牧者』」の3名の殉教者の生き方についての話を通して「この世に生を受けた者として、生きることを忠実に歩んだ殉教者、不屈の信仰を持って生きたこの殉教者に倣って生きることを学び、力もいただいた。」アンケートの感想の中で一番目立った言葉は「宣教」でした。信教の自由が許されていない困難な時代を生き抜いた殉教者3名はそれぞれの豊かな賜物と個性を持っていました。しかし共通していたことは福音を述べ伝える熱意とキリストへの忠誠でした。「過去の殉教者の尊い御血がキリストのように現代の私たちに豊かに注がれ、私たち一人ひとりが現代の中に於いて、宣教をすることに呼ばれていると深く感じました。」「宣教に行くことの重大さを感じました。」「宣教とは人と人のかかわりであり、どのように人と接するか、神とかわりを持つかということです。」「与えられた命を最終まで生きること、信仰の中で人と人の交わりの中で今を大切に生き、多くの人に声を掛ける。これが宣教となる事を願う。」「信仰を伝える使命が自分にあると思いました。日々の社会生活の中で出会う人々との中にその機会は与えられているのだと感じました。」「私のまわりの人々に豊かな信仰の花、香りを届けられるようになりたい。」

「殉教者の霊性」に倣い ～講座受講者アンケートを読んで～

福音宣教の基盤は「神とのかかわり」の深さに根づくものであることを痛感し、信仰生活をより深いものにしたいという意向も多くありました。「どこが違うのだろう。主へのおもいの深さだろうか。特別な人ではないだろうし、小さな子もいたし…。何か今の私と違うのかといつも思う。人事と思っではいけないし、私にはとてもできないと言いたくないし、言っではいけない。しかしもし、このような立場にたたされたなら、はたして信仰を守られるだろうか。すぐころんでしまうのではないか。その思いが心をよぎる度に、何をすする手立ても出ない私は、申し訳なさにゆるしをこうのみです。主を愛します、人を愛します、力の限り。」

司牧者トマス金鍔次兵衛のように「現代の教会も一人ひとりを大切に、一人ひとりが背負っているものに、個別に対応していけるような柔らかで深い霊性のある指導者が必要だと思います。深い魂のレベルで繋がっている実感を養成できる教会が必要です。」という現代の教会への心からのメッセージもありました。

「現代の中にも時を見極めた人(レオ税所七右衛門)、弱さの中に強さをいただいた人(ヨハネ原主水)、散らされた羊を探すよき牧者(トマス金鍔次兵衛)―その人柄、いきかたを通して『生きていく』ことを深く学びたいです」という全体をまとめるような感想もありました。

アンケートを書いてくださった方々お一人おひとりが溝部司教への感謝の言葉と同時に、もっともっとお話が聞きたいという強い希望を寄せられました。

Sr. メリー・ギリス

神父、川村信三神父、シスター片岡留美子、古巣馨神父)による講座を計画しています。宣教司牧評議会および各地区の皆様との相談の上で、できれば各地区(愛媛、香川、高知、徳島)で行いたい所存です。そうすることによって教区民の多くが日本のカトリック教会にとって記念すべきこの年を充実した形で生きること繋がるのではないのでしょうか。プログラムが出来次第、小教区を通して皆様にお知らせします。

その他の講座も例年通りに計画しています。高松で行われている「聖書を生きる」、「賛美の歌」、「いちからはじまるイタリア語」、「子育ての父母と共に」の講座は継続します。また教皇様の新しい回勅の日本語訳ができた(六月の予定)浜口末男神父様の講座を予定しています。「人生の秋を歩んでいる人々と共に」の講座は高知と松山で七月まで継続します。「若者と聖書」は四月半ばから六カ所(高松、

高知、丸亀、道後、坂出、鳴門)で行います。殉教者の講座にも、毎週の講座にも、できるだけ多くの人を誘ってみましょう。「宣教」を目標とする私たちは、神様と自分自身のかかわりを深めるためだけではなく、多くの人にその「福音」を述べ伝える使命をいただいているからです。

聖書勉強会

「若者と聖書」に参加して

鳴門教会 野口のぞみ

心の平和を皆で分かち合うこと、どんな仕打ちを受けても愛し続けることを教えて下さった溝部司教様。常識では理解しにくいイエス様の奇跡を、奇跡を通して神様が伝えようとしているメッセージを読み取る、聖書の読み方を教えて下さった佐藤神父様。自分の中の悪魔に勝つこと、自分の中の神様を試さず信じることを教えて下さった乾神父様。イエス様の行為は命がけで人として考えると並大抵のことではない、と時代背景と人々の気持ちを教えて下さったBr八木。ブラッドリ神父様。ありがとうございます。聖書を朗読し、考え、分かち合い、時には歌い、お話の後はティータイム。とても充実していました。

効率、能率優先の昨今、機械みたいになりたくないから、傷ついた人もそうでない人も人として出会いたいから聖書勉強会は日々の忙しさに忘れそうになる心の存在を取り戻させてくれる時間です。

四月から二回目の勉強会が始まります。皆さんも参加してみませんか？

受洗者の喜びの声

郡中教会

洗礼者ヨハネ 本田浩規

三月二三日の復活祭で、洗礼を授かりました。私は小学生の頃、教会の土曜学校に参加しながらイエス様や聖書のお話について学習し、お祈りの大切さを実感しました。

中学生の頃、初めてクリスマス以外のミサに参加しましたが、神父様のお話は長く、理解することも難しいものでした。また、ミサの間に行列を作り祭壇に近付く姿をみて何をしているのか分かりませんでした。それが聖体拝領であることをミサの後で知りました。

高校生になって、子どもの集いやミサに参加することが多くなりましたが、私もご聖体を頂きたいと考えるようになり、このことをハビエル神父様や今泉先生に相談すると、そのためには洗礼を受ける必要があることを教えていただきました。それから猛勉強？を行い、このたび洗礼を授かることが出来ました。

これからも教会を通して自分を成長させていきたいと思えます。

松山教会

マリア・ミカエラ 西原 紀子

今回、義父、娘、私の三人が洗礼を授かりました。思い起こせば、私は今まで宗教について深く考えたことはありませんでした。しかし、カトリック信者の主人と結婚し、娘が生まれ、その娘を心のやさしい子に育てて欲しいという願いから、ロザリオ幼稚園に通わせることになったのでした。おかげで娘は思いやりのあるやさしい子に成長しました。

そんな中、昨年、私達家族につらく悲しいことが起きました。私が泣いているのを見て娘が、「お母さん、泣きよったらおじいちゃんやおばあちゃん心配するよ。もう泣かれん、笑って」と言って面白い顔をして笑わせようとして



松山教会にて
12名が受洗しました

しました。そんな娘と、決して泣き顔を見せない義母を見て、どこからその強さが出ているのか不思議に思ったのと同時に、これが信仰によって支えられているためだと感じたのでした。

このことが、私が洗礼を受けたいと思うようになった一番の理由です。

今日のこの喜びを忘れず、信仰によって家族がいつも幸福に導かれるよう祈ります。

ドミニコ 丹下隆雄

洗礼の秘跡、堅信の秘跡と続くミサの瞬間はこみ上げて来る喜びと充足感、また数多くの信者の皆様に見守られているという安心感から夢の世界(天国)にいるような気持でした。聖水が額にかかった感触が何か今も残っています。今までの人生でもっとも幸せを感じた瞬間の一つでした。

一九九七年に結婚式でルイス神父様に担当して頂いて以来、約一〇年間縁があり、転勤でスペインに行ったとき、松山に転勤で戻ってきて教会に信者や求道者としてではなく友人として話しに行ったときルイス神父様と話した後には、爽やかな春の微風が心の中を通り抜けていくそんな印象を受けていました。

無償の愛の源について神父様と話しているうちに、目に見えない主の恵み

について確信することができるようになりました。洗礼を授けて頂き、信者としてキリスト様の道を少しづつ進んでいきたいと思えます。

徳島教会

マリア・ジョゼフィン 甲 貞蘭

ご復活祭おめでとうございます。徳島に来て、見学する気持ちで訪れた教会で洗礼を受けることが出来て、信じられないほど嬉しいです。最初は不安もありましたが、神様が私を選んで呼んでくださったから、神様に預けて気楽に行こうと思うと感謝の気持ちでいっぱいになりました。長い道のりをやっと辿り着いた感じですが、ここまで導いてくださった神父様、またいろいろ助けてくださる周りの皆様に恵まれて幸せです。私の信仰の為に祈ってくださいのを感じております。深く感謝いたします。これからは、神様の教えに従うように努力し、神様の光を浴びながら歩みたいと思えます。皆様よろしくお願いたします。ありがとうございます。

シエナのカタリナ 山本真由美

二〇〇八年の復活徹夜祭の日に高松教区徳島教会で洗礼を授けていただきました。ありがとうございます。

ある大学の先生に誘われてクリスマスをお祝いするために教会に行ったのは、今から一八年前になります。その時からクリスマスと復活の時は欠かさず、教会に足を運んでいました。また、洗礼を受けるための勉強会に参加したこともありました。これはなかなか長続きしませんでした。さまざまな体験があり、その中で神様に生かされている自分、護られている自分を感じるようになり、それです。それで、昨年の夏、突然徳島教会のマヘル神父様を訪ね、この日を迎えることになりました。なぜ今なのか、なぜここ徳島なのかなどと考えると非常に不思議な気持ちになります。どうして私を選んでくださったのですか、私でよろしいのですかと神様に問う毎日です。



右から3人目が山本真由美さん
4人目が甲 貞蘭さん

医療のともしび (9) 診察室の会話から ～アメリカと日本の医療費について～

70歳の女性で、いつも通院されている患者さんがいます。最近のことで 娘(42歳)がアメリカの大学に留学中に、心臓の血管が狭窄する病気になりました。股のつけねから静脈を採取し、狭窄した血管と置き換えるバイパス手術が心臓血管外科で行われました。計6日の入院でした。1泊の個室料は約45万円(計約270万円)、6人の医師が関与し各々に支払いが発生したそうです。退院後のリハビリに理学療法士に約300万円が必要でした。そして総額約1500万円の請求がきました。

幸いにも大学で入っていた保険で95%、残りの5%も海外旅行保険で出たそうです。ホテル代(退院後)は実費となったそうです。もし保険で出なければ、土地を売らなければならなかったそうです。

この母親も数年前に、香川県の日赤病院で同じバイパス手術を受けています。請求額は総額約300万円であったそうです。ここから3割の負担となり、高額医療返還もありますので実際の負担は少なかったそうです。

日本の医療費は高いので自然増を抑制しないとイケないと、厚労省は言います。しかし、この事例をみると、日本はアメリカの5分の1なのです。

日本の医療は、危機に瀕しています。産科、救急科、小児科の医師不足は特に深刻です。この10数年間、景気や物価上昇に見合うように医療費が増えれば良かったのですが、実際にはマイナス改定が続きました。しかし、患者が窓口で支払う金額は増加しました。結果的に公的な保険からの支払いおよび医療機関へ入る医療費は抑制され続け、一方で患者が払う負担は増加しました。窓口負担が増加すると医療機関の収入が増加するのと考えるのが普通ですが抑制され続けたのです。

国が医療や福祉にかかる予算を増加させれば、医師をはじめとする医療従事者の確保、医療機関の設備充実、介護事業の充実などへ実効性のある対策を立てる事が可能となるでしょう。医療崩壊を止めるために医療費を増やすのが即効薬だと考えます。(患者が負担する割合は減らす前提です。)

地区だより



高知地区教会学校の合同卒業式 五名が卒業ミサ後遠足を楽しむ

江ノ口教会 宮本匡士

三月二日(日)高知地区教会学校の合同卒業式でした。中島町教会で「子供とともにささげるミサ」六年五名が朗読、共同祈願と奉献を担当し、大人と子どもに「With Christ」[Walk in the Light]など歌いました。

卒業祝いにと陶器のロソクカップ(ロソク付き)を送られた五名は「毎日お祈りしよう」との想いを抱いて大きな拍手の中、司祭とともに退堂しました。

つづいて遠足です。教会近くの電停より「とでん」に乗り、終点の伊野駅前まで一般のお客さんと同様に街並をながめ、マナー満点でゆったりとした気分を味わいました。目的地の仁淀川に着くとさつそく温かい豚汁が準備されていて、大昼食会となりました。凧揚げ、水切り(急流のためちよつとむずかしかった)など川原でいっぱい遊びました。

神学生だより(2)

東京カトリック神学院
哲学科2年 松田栄作

昨年の入学の時8名いたクラスメートが、1年経ってみると6名になりました。東京教区の神学生2人が去りましたが、この2人の決断と行動には感銘を受けます。1人は北海道のトラピスト修道院に入り、もう1人は信徒として生きるという決意を固めました。

トラピストへ行った神学生は、神が自分に与えられた道を飽くことなく探し続け、40代の半ばにして、決断した道に果敢に突き進んで行きました。その勇気と行動力には感銘を受けます。

もう1人の神学生は1年間迷い続けながらも、神様との関わりの中で、見たくなかったところも含めて自分を見つめ、もう一度逃げ出すことなく社会生活を続けることを選び取りました。挫折やコンプレックスの裏返しから歩む道は本来の道ではないと悟ったようです。どんな職業にも貴賤の差はなく、神様との関わりの中で歩む道である限り立派な奉仕なのだと思えることができたようです。彼はまだ20代前半であり、模索が続くかもしれません。しかし元の社会生活に意味を見出した彼は、身の丈にあった、そして満足の行く自分の道を切り開いて行くことでしょう。

いずれにしても、自分の人生を神様に委ねた結果出て来た歩みだと思えます。神と向き合い、自分と向き合い、本来の自分を取り戻した人は、自ら歩み始めるということなのでしょう。充実した、意味のある、自分ならではの道を。



アルパカ 那須にて
松田神学生は、このアルパカでよく和んだとのこと

帰りは
マイクロ

バスで各
教会まで
直行、楽
しい有意
義な一日
でした。

(歩きの予定変更の為、伊野の大黒様と紙の博物館の見学は、次回のたのみとなりました。)



遠足にて

正義と平和協議会に参加して

松山教会 桑田高明

このような趣旨の会合に参加させていただく経験は初めてでありましたが、環境、政治、人権問題等に端を発する、生活に密着していながらも、多くは直接の解決策が市井の間に講じられていない諸々の課題について、実効的な手段を以って前向きな解決を図ろうとしている。また、その活動のネットワークを積極的に拡大しようとして、深く方々が各地におられる事を知り、深く

感銘を受けた次第です。

同時に、現代社会の日常に隠匿された非日常に対して疑問の目を持つこと、グローバルな視点から、各種問題を従来より内部化して捉える事、カトリックの教義と市民活動を一体のものとして、生活と精神活動を一つの環境として定着させて行く事の重要性を改めて実感する契機になり得た事は大きな収穫でありました。

今回の経験を元に、自身も一キリスト者として、周囲への具体的な活動、行動を掲示して参りたい所存です。

小豆島教会からのメッセージ

小豆島教会 浜野尚作

まずは、小豆島教会からご復活のご挨拶を申し上げます。

①に御ミサ ②に右近 ③④十二で十二使徒、二十四の瞳・小豆島・パイプオルガン気高く響きには豪気に互恵・互助 見る・聞く・触れる・嗅ぐ・味覚五感で祈り捧げます。

あわれみ(キリエ)・栄光(グロリア)・感謝(サンクトゥス)平和の賛歌(アニュスデイ)神の子羊つどいて歌い、主を賛美して祈ります。

信徒の一致で皆イサク(笑う人) 小豆島教会皆イサク(笑う人)

ユスト高山右近

列福祈願ミサに参加して

小豆島教会 日向育子

二月三日(日) 一時から私たち小豆島教会信徒七名は、溝部司教様と担当司祭の佐藤神父様に同行して、ユスト高山右近列福ミサ、続いて溝部司教様のご講演に参加しました。

前日から、高槻に宿泊し、司教様と夕食を共にし、雑談に花を咲かせました。カトリックの信徒として、小豆島で生きていく難しさ、ましてや宣教な

ど全く自信がないと正直な胸の内を司教様にぶつけ、それでも昨年教会敷地内に立てられた右近像を何とか地域に根付かせて、高山右近の偉績を紹介できないものかといういろいろご助言をいただきました。

当日は、雪が舞う寒さの中、司教様司式のミサにあずかり、講演が始まるまでの休憩の時間に、高槻教会の信徒の方に高山右近ゆかりの史跡に案内していただきました。お城の後は、神社や公園になっていました。そして、公園の小高い場所に私たちの教会に立っている像と全くおなじ右近像が高くそびえ立っていました。台座が低い小豆島の像の方が、等身大で身近に感じるとも言っていたいただき、なるほどみんなで見せていただいて、城内の民百姓の葬儀には一番前で棺を担がれたという高山右近の謙遜なお姿が、目に浮かぶようでした。講演が始まると、司教様は予定を変更されて、キリシタン時代の信徒の役割についてのお話をされました。談義者という当時のリーダーが中心となって、親方、組を率いていた勢いは、現代にも大きな示唆を与えてくれるものであると感じ、目から鱗でした。また大阪教区の信徒のみなさまの質疑と司教様のご返答を聞いている内、一昨年から司教様が教書にも書

かれてきた、「私たちの教会は、小教区に住まわれているすべての人々の救いのために存在し、祈り、働かなければならない」というお言葉が心に浮かび、高松教区は新しい福音宣教の形をこれから作り上げていける可能性を持っているのだと、大きな喜びを憶えまして。高山右近もきつと願いを共にし、取り次いでくださると確信し、希望のうちにみんなで楽しく巡礼から帰って

家族で参加した思い出深い

二十六聖人巡礼ウォーク

三月一日・二日 福田門司港

桜町教会 尾島 舞

今回の巡礼は私にとつて最後となりましたが、両親も初参加し、思い出深いものとなりました。

そしてメンバーの皆様
の優しさ、愛をたくさん
いただいた巡礼でした。
今、感謝の気持ち
で振り返っています。

母は少し足が悪く杖
を使って歩いていたの
ですが、メンバーの長
谷川さんは、坂道の所
で先回りしてからまた下り、「この坂
はかなりきついから、あちちの道を使っ
てください」と言いに来て下さいまし
た。また先頭と遠く離れてしまうと、



尾島さん親子
右が舞さん

本田さんが最後の尾の私達が迷わず来られるようにいつも後ろを気にして、止まって調整して下さいました。そしてリーダーの多田さんは、四月から長崎の修道院に行く私を巡礼ウォークで九州へ送るために、今回必ず九州へ入れるよう計画して下さいました。家族写真もたくさん撮っていただき、私達家族にとつて本当にいい思い出になりました。
まだ沢山のことがあり、書ききれないのが残念です。二十六聖人もこのように、子供や体の弱い人をいたわり、支え合って歩まれたのではないかと思います。巡礼で学んだことを大切に、優しさ、思いやりのある人になっていきたいです。

きました。
そして、今改めて思うことは、私たちに必要なのはあの時代のみなさまほどの覚悟。
高松教区を新しく創りあげていくために、高松教区の信徒一人一人が形や大きさは違っても一つずつその手で石を積み上げて、司教様、神父様方とみんなで笑って苦勞を共にしていく覚悟と勇氣。それを主に強く願います。

高松教区愛媛地区「女性の集い」 女性の役割を話そう

愛媛地区担当 木下 和子
関 ちず子

溝部司教様の「教会の刷新には、女性の役割が大きい」という言葉を受けて、春の気配は感じるものの、まだ寒い二月一六日Srギリスを講師にお迎えし、愛媛の各教会から女性五〇名が松山教会に集まり、四国四県共通テーマの「女性の集い」が開かれました。

「教会における女性の役割」というテーマで、イエスの時代から現代まで「女性の持つ母性Ⅱ育む愛」が教会の中で大きな役割を果たしてきたこと。今教会に求められている「交わり・一致」のために女性は大きな役割と使命があるのではないか。このようなお話の後、グループで話し合い、発表しました。

どの教会も高齢化や青少年・外国人との交わりなど、同様の問題を抱えていましたが、一人一人が出来ることを頑張り、宣教についても真剣に考えている様子がよく分かりました。また、各教会の方と交わり、話し合いができて、とても有意義な時間でもありました。

まとめの話の中で、Srギリスは「宣教はこぶしを振り上げるのではなく、

自然に湧き出るもの」、「女性は守る姿勢から壁をつくりトラブルの素になる」と述べられました。このお言葉を私たちは印象深く受け止めました。



グループに分かれての話し合い

彼女がおりるとき「聖霊に満たされていきますね」と言っていました。このお言葉は理解できませんでしたが、

たが、後で振り返ってみますと、この寒い中集まって下さり、それぞれの方が聖霊に素直に心を傾け受け入れ、この集いの実りを持ち帰っていただいた事を指しておられるのではないかと思います。思いを持ち、大変嬉しく、また感謝している次第です。

来年も、「どうかお会いしましょう。姉妹たち」と願うばかりです。そして、松山教会の手作りケーキをお食べください。

最後に、遠い所からお越し頂きお世話いただいたSrギリス、Sr高松に厚く感謝いたします。

有難うございました 濱口秀昭神父様

坂出教会 梅木 正

神父様のおかげで教会の中、とても風通しが良くなりました。有難うございました。

あと三年神父様が居て下さったらと願ったのは、私一人ではなく全員の願いだったと思います。その反面あまりにも忙しさをみていましたので、もしかしたらと言つ気もない訳ではありませんでした。そのもろろが当たりのショックでした。これからも月に一回は坂出に来てくださるの信じ、神父様が教えてくださった「何事にも時がある」を、納得の出来ない事、壁にぶち当たった時に神父様を思い出して、自分の生活の中で見つめ直す時にしたいと考えています。坂出教会信徒一同、いつまでも秀昭神父様を忘れることはありません。どうか健康には十分気を付けて、高松教区のために働いて下さい。本当に有難うございました。



イースターアトク

聖劇を通して聖週間を体験

桜町教会 長谷川 聖

三月一六日、桜町教会聖堂で第一回イースターアトク「喜べ！ナザレのイエスはよみがえられた！」が上演された。毎年受難の主日のミサ後、教会学校の子供達を中心に、エルサレム入城から御復活までを上演する聖劇。今年は一七人の子供と二人の大人、そして観客は群衆として参加し、皆が一体となってエルサレムで起こったこと

を体験した。イエスの死と復活を、過去のこととしてではなく、現在の自分の生活の中において考える良い機会となった。



新しくお迎えした 土屋和彦神父、サンティアゴ・サイズ神父、
谷口広海氏を紹介いたします。これからよろしくお願ひします。

(土屋和彦神父)



初めまして。さいたま教区から参りました土屋和彦と申します。自己紹介させて頂きます。産一八九八年二月練馬四〇歳。小学校二熊本卒。中高二宮城卒。その後モ新潟・埼玉と転々。四国には今回が初めて。職歴二六年弱セント製造会社勤務のみ。一九九六年三月東京カトリック神学院に入院。二〇〇一年二月助祭叙階、その後一年余りフィリピンにて研修。二〇〇三年四月に司祭叙階の恵みに与り、北関東の栃木県内の三小教区(上三川・真岡・栃木)で奉仕。

主と共に満部司教様と共に心一つに歩んでおられる皆様の働きを、教区報・ホームページ・カトリック新聞などを通して、ただいま勉強中です。特に「聖書」と「殉教者の生き様」を柱に取り組んでおられる諸活動・協力宣教師の工夫に心惹かれます。皆様と王の食卓を囲む時を楽しみにしております。宜しくお願ひいたします。祈りのうちに。

(サンティアゴ・サイズ神父)



ドミニコ修道会司祭。スペイン出身。八一年来日、今迄教会、郡中教会などで司牧。九〇年韓国へ。以後ソウルでドミニコ会の神学生の指導に当たってきた。今回の来日は十八年ぶり。

道後教会では献堂五十周年を迎えるに当たり新しい決意で信徒とともに宣教活動を深めていきたい。特に青年や子供の育成に力を入れる。日曜学校を復活させたい。また信徒の家庭訪問や病者訪問などで信徒との絆を強めて、生き生きとした信仰共同体づくりをめざしたい。

(イルダヤラージ神父)



宣教師とは誰でしょうか？子供の頃私が思っていたのは外国人のことでした。でも、みんなが宣教師です。今私も日本で宣教師です。どうして日本でしょうか、それは分かりません。ローマからいわれました。たくさん宣教師たちと一緒に働きたいと思っています。

私の名前はアントニオ・ニサーミ・イルダヤラージで、オブリート会の司祭です。みんな「イル」と呼んでください。なぜなら、覚えやすいからです。三年前インドから参りました。二年へらい名古屋にあるMWCYという日本語学校で日本語を勉強しました。一年間、大阪の伊丹教会で働きました。今高松教区にある中島町教会のチームに入って働いています。これから、お世話になります。どうぞ、よろしくお願ひします。

(谷口広海氏)

皆さん、こんにちは！はじめまして。この四月から教区事務所で働くことになりました谷口広海です。未だ若干六〇歳。出身は長崎県佐世保市の三浦教会です。現在は単身で



司教館に居候の身ですが、こちらでの家族構成は、一〇月頃に、妻と娘との三人家族になる予定です。実を言えば、家族全員で一人一人になります。が、現在は一家離散中で、妻は佐世保、娘息子達は長崎、大分、東京と散りぢり。大好きなものは音楽、聖歌を歌っていれば幸せです。皆様とのこれからの出会いを楽しみに大事にしたいと思っております。宜しくお願ひいたします。主の平和のうちに。

(佐世保市三浦町教会 信徒)

谷口広海氏を紹介させて頂きます。

最愛の奥様・六人の息子さん・三人の娘さんのお父様です。ご家庭では子供さん方一人ひとりに正面から向き合われ、今どきなかなでできない父親像をみる事ができます。もちろん教会学校におかれても、今までたくさんの子供達にご自分の子供と同じように接しられ、誉めるときは誉め、叱るときは叱り、親以上に愛情をもってご指導なさっていました。

又、教会奉仕には、誰にも真似することができないくらいご奉仕されています。教会学校のカテキスタはもちろん、聖歌の指導・ミサ典礼の準備等、これから居なくなると困ることばかりと、私達残されたもの少し不安に感じております。でも、神様が高松教区にお呼びになられたのですから、喜んで皆様方のもとに送り出したいと思ひます。

どうぞ皆様、谷口さんに無理難題をお願いして、佐世保のことを思い出されないように、毎日忙しく神様にお仕えしていただきますよう、お祈り申し上げたいと思ひます。

WYD in JAPAN 「世界青年の日」を国内でも盛り上げよう!

第23回「世界青年の日」が2008年7月15日から20日にかけて、シドニーにおいて開催されます。しかし、日本の多くの青年たちは、種々の理由でそれに参加することが難しいでしょう。そこで、これまでも日本の中で行っていた日本版のWYDを青少年司牧部門として企画したいと考えました。シドニー大会でも国内でのWYDを準備することは考えていましたが、早くより国内でも「世界青年の日」を実現したいとの要望があがっており、その熱意を何とかして実現したいと、今回は青少年司牧部門の中に準備組織を立ち上げました。これから全国の教区の青少年委員会と連絡をとって実現に向けての歩みをいたすつもりです。シドニー大会も、国内版も、大会に参加することは大事ですが、それよりも大会に向けての歩みを共にしていくことが大切です。

今回のテーマは、「聖霊と証し」ということです。青年は聖霊に満たされて、自らを変革し、ことばを語ることでできます。聖霊に活かされた青年は現代社会にキリストの証し人となることのできるのです。「世界青年の日」は、前教皇ヨハネ・パウロ2世によって定められ、聖週間にそってプログラムが作られています。国内の大会もこの意向にそって行われることとなります。司教によるカテケシス、十字架の道行き、復活徹夜祭などが盛り込まれています。また、ミニ巡礼を行い、共に歩きながら人生を語ることも計画します。「世界青年の日」と称しているため、国内であっても日本に生活する多国籍の青年と出会う場所となることを願っています。

高松教区司教 フランシスコ・ザビエル 溝部 脩

- 日 程 : 2008年8月14日(木)~17日(日)
- 会 場 : 星美ホーム山中林間寮(山梨県南都留郡山中248-1)
- 費 用 : 1万8000円(予定)
- 参加資格 : 18歳(高校生を除く) ~ 35歳の青年男女、国籍不問
- 申し込み : 下記教区窓口へ
- 募集期間 : ~2008年6月30日(200名の定員になり次第、締め切ります。)

高松教区WYD in JAPAN 教区窓口
〒760-0074
香川県高松市桜町1-8-9 高松教区本部事務局
TEL 087-831-6659 FAX 087-833-1484
担当者 ブラザー八木

投稿記事募集

【テーマ】
テーマは、特に定めません。



【投稿要領】
字数は300字以内(写真歓迎)
「所属教会名、住所、氏名」明記のこと。
中傷・誹謗はご遠慮下さい。
原稿はできるだけメールで送って下さい。
写真もデジカメで撮影したものはメールで送って下さい。

【投稿先】
メール : tk-koho@mxi.netwave.or.jp
郵便 : 〒760-0074
高松市桜町1丁目8-9
カトリック高松司教区広報担当
TEL : 087-831-6659
FAX : 087-833-1484

お知らせコーナー

主な司教日程

- 5月1日(木) 殉教者委員会(福岡)
- 11日(日) 高松ブロック協力司牧堅信式
- 13日(火) 司祭評議会
- 14日(水) 西日本地区ソフト交流会
- 15日(木) 幼稚園連合会総会
- 16日(金) 宣教司牧評議会
- 18日(日) ルルド祭(三本松)
- 19日(月) ~23日(金)
ベトナム訪問
- 24日(土) 朝拝会全国大会(熊本)
- 28日(水) ~29日(木)
教戒師の集い
- 30日(金) 修道女連盟(奄美)
- 6月1日(日) 堅信式(松山)
- 2日(月) ~6日(金)
司教総会
- 10日(火) 司祭評議会
- 10日(火) ~14日(土)
長崎教区司祭黙想会
- 17日(火) 広報委員会研修会(潮見)
- 20日(金) 宣教司牧評議会
- 22日(日) 三河島教会75周年記念式典
- 29日(日) カトリック医師会

編集後記

寒い冬が明けたかと思つと、もう夏の猛暑の片鱗を感じる季節となりました。編集局にも変化がありました。新しい仲間が二人加わりました。桜町教会の長崎野崎悟史さんと、長崎から教区にいられた谷口広海さんです。よろしくお願ひします。

